



## 特集 バスはゆく、ウェールズ。

光成クンと奥さんの出たところ大英帝国



### 第2章 迷走

マンチェスター着。アタリマエのようにトラムが走っています。下調べでは、ヤドに近いトラムやバスの路線がないので、タクシーに乗ります。中心部のそばの川（岡山なら旭川）を渡ると——いきなりだっ広い岡。縦横に太い道路、点々と郊外型店舗、見渡す限り公共交通なし。ヤドは見事に「車で移動するセールスマン用、平家建て、荒野のビジネスホテル」です。空港から中心部まではずっとフニキのある商業地だったんですが……そういう都市計画なんだろうね。徹底してるなあ。

夕方。「荒野のビジネスホテル」に、ボーイジョージ君やルーニー君がぞろぞろやってきます。ロビーのテレビでサッカー中継が始まりました。ビール飲み飲み見えています。マンUのナイターゲーム（アウェー）みたい。って、この人たち、あの有名な、フーリガン？実物？ビジネスホテルでみんなテレビ観戦？マンUの旗色が悪くなったらヤバいかもしれないので、早々に部屋に引き揚げました。こうして大英帝国第一夜は更けてゆく……

翌朝、マンチェスター駅からウェールズへ。きれいな車両で、急行かなと思ったら各停。「国境」のあたりから、看板に駅名が2つ。英語とウェールズ語です。（これはもう別の言語で……ウェールズ語で「素晴らしい天気だね」と言うと、英語的には「この汚らしいユダヤ人め」と聞こえるのだそうです。）

およそ2時間。切り通しをぬけたところで、奥さんが「キャー」と言いました。正面左手にいきなり凄い城壁。コンウィ城、世界文化遺産です。列車は手前を曲がって、近くの終点、Llandudnoに。

Llandudno（しいてカタカナにすると「スランドゥゥン」）。ウェー

ルズ語なのね）駅のホームは外の地面とツライチで、しかも改札がないので、自家用車やTXがホームに直接乗りつけてきます。軽いカルチャーショックです。自転車もぞろぞろ降りてきました。ホームを見ると、「自転車はここから乗れ」という表示があります。完全にアタリマエになっとるのですね。

スランドゥゥンは、シャーロック・ホームズのころに作られた、海辺の保養地です。海に突き出した砂州の上に、当時からのリゾートホテルや分譲別荘（今は家族経営のB&B）がずらっと並んで、奥さん好みのカワイさ。

ヤドで一服してから、「英国有数の庭園」ポドナント・ガーデンへ。地理勘がないので、とりあえずTXで。……ええ、RACDA 会員らしくないというのは認めます。しかしですね。Betws-y-Coed だの Llanrwst だのいう英語じゃねえ地名を、ウェールズ1日目に正しく聞いたり発音する自信なんか、私にはないわけですよ。——しかし、結論からいうと、それでもバスで行くべきでした。行きにラクをした報いで、帰りにエラい目にあつたのです。

さてポドナント・ガーデン。ちょっと凄い。山の斜面（谷2つ入り）を丸ごと使って、後楽園が何個

入るんだ金いくらかけてるんだ的庭園です。ゆっくり回ったつもりじゃないのに閉園時間。帰りはバスの予定ですが、どこで（&道のどっち側で）待たりたいのかわかりません。ガーデンの案内板にはバス停マークがあるのですが、地図が現場と（90°ほど）違っているので、まるで信用できません。待ってる客は私たちだけ（みんなクルマ）。ゲートが閉まってて、中の人にも聞けません。次のバスが最終ぼくて、ひとけのない山の中なので、逃がしたら120%遭難です。ポドナント、減点1。

運よく、まず来た（逆向きの）バスを止めて運ちゃんに聞くことができました。「このバスが折り返して戻るから待ってる」と言った（ていうか、そんな感じの身ぶり手ぶりに見えた）ので、また2人っきりで待ちます。約20分、やっとバスが来てくれました。夏場でよかった。緯度が高いので8時すぎまで明るいのです。これで暗くなってきてたら、2人して泣いてるな……